



# 飯舘村における農業再生と風評被害払拭のための教育研究プログラム

## 東京大学大学院農学生命科学研究科

### 飯舘村との連携

**■基本情報■**

総面積:  
230.13km<sup>2</sup>

村内居住者:  
937名(世帯数:475)  
\*2018年11月1日現在  
\*飯舘村公表避難状況資料参照

2017年3月31日に  
帰還困難区域(長泥)  
を除き避難指示解除

- 事業責任者らは、原発事故の3か月後から飯舘村に赴き、NPO法人や農家と協働で独自の農地除染法を開発し作物の試験栽培を実施
- 2018年3月5日、教員や学生が、村そして村民と連携した研究を進め、農畜産業の復興に繋げるため、飯舘村と東京大学農学生命科学研究科の間で農畜産業復興に関する連携協定が行われた



2018年3月の連携協定

### プログラム全体像

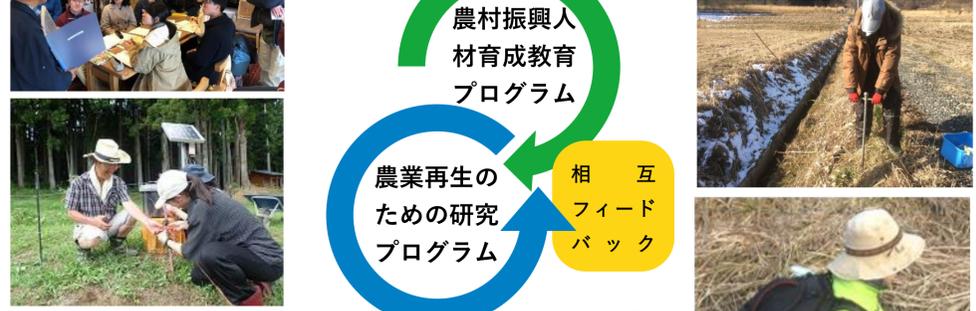
**課題** 放射能汚染地というハンデを背負った飯舘村の復興には、単なる技術的な除染やインフラの物理的再建だけで終わらず、その先に新しい日本型(小規模世代間交流型)農業の創設にチャレンジする若者の育成が必要

本事業では、学生を対象とした飯舘村の現地見学会や教育研究活動を展開し、風評被害を払拭する取り組みを進めると同時に、震災直後から蓄積されてきた知識(大学が有する復興知)を現場の課題解決と研究活動に展開するFPBL(Field & Project Based Learning)を実践的に試みる。

2020年度は、CO-VID19の感染拡大防止を最優先にしながらも、対策を万全に敷いた上での現地活動(車内からの村内見学や屋外におけるワークショップや稲刈り体験など)や、オンラインの要素(ウェブ会議、リモートモニタリングシステムやウェブプラットフォーム)を加えることで飯舘村現地とのコミュニケーションの場をさらに拡大しながら教育・研究活動を実施した。

- ✓ プログラム体験レポートのテキスト分析
- ✓ プログラムを通じた意識の経時的变化調査
- ✓ 意識の構造変化に着目した教育効果の評価

大学知を教育研究活動に展開し、飯舘村をフィールドとして学生に地域復興のあり方を考えさせる教育プログラムの実施と評価



- ✓ 農業環境中の放射性セシウムの把握
  - ✓ 作物のセシウム吸収に関する検討
  - ✓ 根圏土壌の放射性セシウムの挙動
- 地域復興実用化開発等促進事業「安全な農畜産物生産を支援するICT営農管理システムの開発」を推進・実用化



### 2020年度の活動と成果

**(1)農村復興人材育成教育プログラム**  
全国各地の学生を飯舘村に招いてワークショップと現地見学会を実施した。またウェブ会議システムを介した飯舘村現地と東京を繋ぐ交流会や意見交換会を開催した。加えてウェブ上の諸システムを活かして、飯舘村ひいては福島に遠隔で面的に関われるシステムとして「大学-村間(お手伝い)プラットフォーム」の確立した。

村-大学連携プラットフォーム

村長とのウェブ意見交換会

除染土埋設農地の放射線測定実習

**(2)農業再生のための研究プログラム**  
斜面等からの放射性セシウムの流入の寄与や降下物の農作物汚染の影響を検討し、また除染後の農地において課題となっている排水不良について、当該農地へのIoT農業システムの導入を行い対応策を検討した。加えて、飯舘村の農地に適合した堆肥作りを目指す基礎研究を遠隔モニタリングシステムを介して実施した。

除染後農地の土壌硬度調査

堆肥場の遠隔モニタリングシステム

監視カメラに映ったイノシシ

### 飯舘村復興知メディア

本プログラムの計画趣旨や記録などは、こちらのウェブサイトでご覧頂けます

Googleで[までい大学]

本プログラムの現地での活動などは随時Twitterにて更新中です

Twitterで[#までい大学]

本プログラムを通して撮られた飯舘村の素敵な写真の更新はInstagramにて

Instagramで[#までい大学]

本プログラムを通して撮られた動画などはYouTubeで投稿されています

YouTubeで["までい大学"]

復興知の一つである除染後農地の排水改善技術が学べる松塚土壌博物館はこちら

Googleで[松塚土壌博物館]

本プログラムを通して飯舘村で活動する「東大むら塾」のウェブサイト

Googleで[東大むら塾]